

宮古西原方言の《のぼる》と《あがる》の意味

名 嘉 真 三 成

1. はじめに

東京方言の「ノボル」と「アガル」の意味特徴については、これまで柴田武編1976や池上嘉彦1977などの勝れた御研究があり、ほとんど明確にされ、いわゆるこれら二語の基本的な違いの一つは、前者が「上への移動の過程が中心」になるのに対し、後者は「上への移動の結果が中心」になると考えられている。

ところが、沖縄宮古西原方言では、

(1 a) zasic'i 'Nka'i nuu'i 《座敷にノボル》

(1 b) *zasic'i 'Nka'i 'aga'i 《座敷にアガル》

のように東京方言の例とまったく逆の場合があり、西原方言の/nuu'i/と/'aga'i/の意味特徴は必ずしも「過程」と「結果」に視点があるとはいえない。また、

(2 a) *tida nu nuu'i 《太陽がノボル》

(2 b) tida nu 'aga'i 《太陽がアガル》

の例で(2 a)が使えないことも東京方言の「ノボル」の用法と異なる点である。このように、西原方言の/nuu'i/と/'aga'i/は東京方言の「ノボル」と「アガル」の意味用法にそのまま対応するとは考えられない。そこで、西原方言の/nuu'i/と/'aga'i/の意味特徴を明らかにする必要がある。

本稿は、以上の観点から西原方言の/nuu'i/と/'aga'i/の意味特徴を記述する。

なお、/nuu'i/と/'aga'i/は音韻法則上、東京方言の/noboru/《のぼる》と/'agaru/《あがる》にそれぞれ対応する語である。

注。ここでは/nuu'i/、/'aga'i/が「連用形+居り」であるかどうかは問わない。

2. /nuu'i/と/'aga'i/の意味分析

2. 1 移動の主体

西原方言の/nuu'i/と/'aga'i/は、いずれも東京方言同様「ある主体が上の方へ移動する」という意味特徴を有する移動動詞である。

注。〈上の方へ〉とは相対的な概念であり、頭の

方向が上の方である。

しかし、これら二語が「過程」と「結果」という意味特徴に関係しないことは前記した。たとえば、次のとおりである。

(3 a) nika'i 'Nka'i nuurii 'u'i 《二階にノボッテいる》

(3 b) *nika'i 'Nka'i 'agarii 'u'i 《二階にアガッテいる》

(3 a)は、①ロープなどを用いてよじ登っている場合、②二階に上っている状態を表わす場合の二通りの意味が考えられる。このうち、①は「過程」に視点があるのだから東京方言の「ノボル」も使用可能であろう。しかし、②は「結果」に視点があるにもかかわらず、当方言では/nuu'i/が用いられる。このように、/nuu'i/と/'aga'i/は東京方言の「ノボル」と「アガル」とは性格を異にし、いわば/nuu'i/の用法が/'aga'i/に較べて広がっている。

注。上代日本語の「ノボル」も「アガル」より用法が広がったようである(『時代別国語大辞典 上代編』三省堂)。

そこで、まずこれら二語がどのような主体に用いられるかについて検討する。

既に、(1 a)と(3 a)から/nuu'i/の主体が[+human]であろうことは理解されたが、さらに(2 a)、(2 b)から/nuu'i/と/'aga'i/の主体は[±animate]であろうと推定される。

(4 a) kii 'Nka'i nuu'i 《木にノボル》

(5 a) 'jaa nu hana taahi nuu'i 《屋根上までノボル》

(4)、(5)の文はともに/'aga'i/を用いない。そして、(4 a)および(5 a)の主体はいずれも人間または上への移動能力のある動物(猿、猫、犬など)である。しかも、西原方言では(2 a)のように太陽に/nuu'i/を用いないし、

(6 a) *kjuusi nu ti'N ka'i nuu'i 《煙が空に

ノボル

(6 b) kjuusi nu ti'N ka'i 'aga'i 《煙が空にアガル》

(7 a) *'iciki nu nuu'i 《湯気がノボル》

(7 b) 'iciki nu 'aga'i 《湯気がアガル》

などのように煙や湯気にもノヌウイを用いない。また、広い意味での空間的移動を示す場合に、

(8 a) 'uugii 'atu 'N 'i'N kara nuu'i 《泳いだ後、海からノボル》

(8 b) *'uugii 'atu 'N 'i'N kara 'aga'i 《泳いだ後、海からアガル》

とノヌウイを用いノアガイを使わない。従って、以上の事実からノヌウイの主体は [+animate] であり、ノアガイのそれは [-animate] であると考えられる。

ノヌウイ/: <主体は [+animate]>

ノアガイ/: <主体は [-animate]>

2. 2 移動の状態

次に、ノヌウイとノアガイの移動状態の特徴について述べる。

まず、ノヌウイの移動の状態では次の特徴があげられる。

(9 b) saQtii tii nu 'aga'ita'i 《サッと手がアガッタ》

(10 b) 'Nzi kata nu du 'agarii 'u'i 《右肩がアガッている》

即ち、手や肩は全体の中の一部であり、その一部分の移動の際にはノヌウイは使用されない。このことから、ノヌウイは東京方言と同じく、<全体的な移動>の状態を示し、ノアガイにはそのような制約はない。

ノヌウイ/: <全体的な移動>

一方、ノアガイは移動状態として<基準点の移動>という特徴を持つ。

(11 a) *kaa nu mizi nu nuu'ita'i 《川の水面がノボッタ》

(11 b) kaa nu mizi nu 'aga'ita'i 《川の水面がアガッタ》

(12 a) *hida'i ma'ju nu hiQcja nuu'ita'i 《左の眉毛が少しノボッタ》

(12 b) hida'i ma'ju nu hiQcja 'aga'ita'i 《左の眉毛が少しアガッタ》

水面や眉毛はある一定の基準点があるものと考えられ、これらはともに<基準点を移動する>状態を示している。

ノアガイ/: <基準点の移動>

さらに、ノヌウイとノアガイには次のような特徴が見られる。

(13 a) 'ama'ina'u nu du nuurii ha'i 《龍巻きがノボッて行く》

(13 b) 'ama'ina'u nu du 'agarii ha'i 《龍巻きがアガッて行く》

(13 a), (13 b) とともに使用可能である。しかし、これら二つは上昇する状態を異にする。前者は、単に龍巻きが抽象的に上昇する状態を示し、いわば静的な移動である。たとえば、遠くから見た龍巻きなどはこのような上昇移動をする。これに対し、後者は旋風を伴いくなりながら上昇する具体的な状態をあらわし、いわゆる動的な移動である。これは、次に示す例文からも支持されよう。

(14 a) 'ama'ina'u nu du nuurii 'agarii ha'i 《龍巻きがノボッて、アガッて行く》

(14 b) *'ama'ina'u nu du 'agarii nuurii ha'i 《龍巻きがアガッて、ノボッて行く》

即ち、視覚的に龍巻きの動きが認められる地上に近い状態での上昇ではノヌウイが用いられ、その動きが認められなくなった程上昇した(あるいは遠のいた)段階ではノアガイが用いられる。この意味の特徴は、ノヌウイが [+animate] に、そしてノアガイが [-animate] に使用されるという特徴から当然予想されることである。因に、(2 a) の例文のように太陽がのぼることができないのは、太陽は常に静的上昇をするからだと考えられる。

以上のことからノヌウイとノアガイについて、次のようにまとめることができる。

ノヌウイ/: <動的な移動>

ノアガイ/: <静的な移動>

なお、西原方言では、

(15) 雨がアガッタ

(16) 仕事は二時でアガッタ

(17) 噂にノボル

(18) 魚が食膳にノボル

などの慣用的表現は使用されない。

3. おわりに

以上、西原方言のノヌウイとノアガイについて意味分析を行ったが、これで全てが明確に記述された訳ではない。従って、今後はさらに明確な記述を試みると同時に記述方法についても考え、ひいては日本祖語の *nəberu 《のぼる》と *agaru 《あがる》の意味特徴に関しても、比較方言学的に明らかにする必要がある。